

白い人・黄色い人

遠藤周作

ほか二編



しろ ひと きいろ ひと
白い人・黄色い人 ほか二編

えん どうしゅう さく
遠藤周作

© Shusaku Endo 1971

昭和46年12月15日第1刷発行
昭和60年5月30日第21刷発行

発行者——野間惟道

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京8-3930

Printed in Japan



講談社文庫
定価220円

デザイン——菊地信義

製版——株式会社まゆら美研

印刷——豊国オフセット株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。(庫一)

ISBN4-06-131066-6 (2)



講談社文庫

白い人|黄色い人

ほか二編

遠藤周作

講談社

目次

白い人

五

黄色い人

七九

アデンまで

一五一

学生

一八一

解説

武田友寿

一九七

『アデンまで』と『学生』

一九八

『白い人』と『黄色い人』

二〇四

年譜

二二三

白
い
人

I

一九四二年、一月二十八日、この記録をしたためておく。聯合軍はすでにヴァランスに迫っているから、早くて明日か明後日にはリヨン市に到着するだろう。敗北がもう決定的であることは、ナチ自身が一番よく知っている。

今も、このペンをはしらせている私の部屋の窓硝子が烈しく震えている。抗戦の砲声のためではない。ナチがみずから爆破したローヌ河橋梁の炸裂音である。けれども橋梁を崩し、ヴェイエンヌからリヨンに至るK2道路を寸断したところで津浪のような聯合軍は防ぎとめられる筈はない。巴里のフォン・シュテット將軍はリヨン死守を厳命したが、死守はおろか作戦的後退すらうまくいくかわかったものではない。

どの顔も兇暴にゆがめられている。聯合軍にたいするナチの憎しみは昨日から、リヨン市民に注がれている。死に追いつめられた鼠が猫にではなく自分の一族に飛びかかるように、今日、フランツ、ハンツ、ペーター、といったナチの兵士たちはリヨン市民たちをくるしめる、それだけの為に街になだれ込んでいる。レピュブリック街で、エミール・ゾラ街で、彼等は娘たちを凌

辱し、民家や商店をあらしたりしている。ナチの誇った軍紀など糞くらえだ。

私は彼等の血ばしった眼や憤怒にゆがんだ頬を想像するだけで、うすい嗤いが唇にうかぶのを禁じることができない。文化とか基督教とか、ヒューマニズムなどはなんの役にもたない今日ののだ。ナチに限ったことではあるまい。聯合軍であろうが、文明人であろうが、黄色人であろうが、人間はみな、そうなのだ。今日、虐殺される者は明日は虐殺者、拷問者になる。明日とはリヨン市民が牙をならして、逃げ遅れたドイツ人、彼等を裏切った協力者にとびかかる日だ。マルキ・ド・サドはうまいことを言っている。

……かくて人間の血は赤くそまり

その目は拷問の快樂に赫き……

私のつむった眼の奥で、あの老犬を組みしいた女中イボンヌの弾力ある腿の白さがハッキリと
うかぶ。私はそれを人間が、他者にたいする真実の姿勢だと思う。

イボンヌの白い腿……クロワ・ルツスの家の窓から、藤の花の散る道に偶然みつけたあの小事件は私の少年時代にほとんど決定的な痕をのこした。けれども、他の少年たちならなんでもなく見過してしまったこの出来ごとが、なぜ、私にだけ焼きつくような極印をあたえたのだらう。今日、仏蘭西人でありながら、ナチの秘密警察の片割れとなり、同胞を責め苛む路を私に選ばせたものを説明するために、幼年時代の記憶まで遡らねばなるまい。

私の父は仏蘭西人だったが、リールの工業技術学校にいる時、独逸人の母と婚約した。結婚後、彼等はリヨンに住み、私はみにくい子だった。のみならず生れつき斜視だった。後年父を思いだすたびに、私はあの十八世紀の卑俗な放蕩児の肖像画を想起してしまう。リヨンのオペラ座の横で、老婆たちがみだらな雑誌と一緒に売っている、拙い猥画の主人公たちの顔だ。実際、彼は、肉づきのよい、背のひくい、こぶとりの男だった。白いブヨブヨした肉体と、女のように小さな手を持ち、涙腺が発達しているのか眼だけは、いつも、涙でぬれていた。後年、自動車事故で死ぬまで、病氣らしい病氣も、死の恐怖もしらなかった。

私は父のゴムマリのような肉体に指をあてたことがある。指跡は、いつまでも彼の白い皮膚の上のこっていた。母がきびしい清教徒になったのも、考えると父の放蕩にたいする嫌悪からだったのかもしれない。自分の快樂しか顧みぬこの男は、やせこけた斜視の息子に愛情を持っていなかった。私が決して忘れることのできない仕うちがある。ある日、彼は指を私の眼の前に動かしながら言った。

「右を見ろと言うのに、右だよ」それから彼はわざと大きな溜息をした。「一生、娘たちにもてないよ。お前は」

自分の顔だちのみにくさをハッキリ思いしらされたのは、この時からだった。私はそれを残酷に宣言した父を憎んだ。鏡をみることもくるしく、路で少女たちにすれ違う時やあたらしい女中に初めて引き合わされる時、辛かった。

私は父がどれほど母を愛していたのかも知らない。彼は仕事のためと言って、一カ月の半分は

留守にしていた。あれは確か、私が十一歳の時である。母はその日、家にいなかった。その日父は、工場から突然、ひとりの若い栗色の髪の子を連れてかえってきた。ながいこと、二人は一室にとじこもったまま出てこなかった。女はかえりがけに玄關で私の頭をなで、「可愛い子ね」と言った。そのとき私はこの女を憎んだ。手さげの中から一袋のボンボンをくれた。

女のことともボンボンのことも母には告げはしなかった。もちろん父へ味方したわけでもない。母に同情したからでもない。私はただこの秘密を、秘密としてかくしておくことになぜか悦びを感じたのである。よる、寢床のなかで、そのボンボンを、ひそかに噛みしめながら、私はこの秘密の甘みをゆっくりと味わった。けれども誤解しないでほしい。今日の私の無神論は父の教育のためではない。清教徒である母への反抗からはじまったと言ったほうが正しいのだ。

一九三〇年代のリヨンにおけるプロテスタントの家庭を今日、想像することはむづかしい。父にたいする反動から当然母は私に、きびしい禁慾主義を押しつけた。十歳をすぎてから従姉妹とさえも二人きりでいることは許さなかった。彼女はなによりも、私を罪に誘うものとして肉慾の目覚めを警戒したのである。夜、床につく時も下半身から眼をそらして寝衣に着かえさせられ、両手を毛布の下に入れることも禁じられた。母は、既に慾望の血が騒ぎはじめた私の肉体から、その炎をかきたてる一切のものを追い払おうと懸命だった。

おろかな母、と私は後年屢々思っている。そのように気を配らなくても、私は娘に嘲られる自分の顔だちを知っていた。彼女は「ふみくだかれた灰から一層、火の燃えあがる」という古い諺を忘れていたのだ。とにかく、私はサン・チレーネ街のプロテスタントの小学校で牧師がわれわ

れに与えた書物以外は絶対によまされもせず、普通その頃の年齢の子供の愛読する「灰かつぎ」や「アラビアンナイト」すらも、私の官能を刺激させ目覚めさせると思ったのであろう、彼女は私がそれらの本を友人から借りることさえゆるさなかったのである。

一九三〇年頃のリオンはまだ十八世紀時代のリオンと殆ど変っていない。ふるい湿気のこもった何十年の人間たちの臭気の滲んだクロワ・ルッスの館で、私はなにもせずに、独りで、ジツと生きていた。他の子供たちのように女の子とママごとをしたり、輪投げをすることさえ私にはできなかつた。しかし、悪魔の最大の詭計はその姿を見せないことである。彼はすべての罪から隔てられた筈の私にある日、突然、悪の快感を教えてくれた……

家の近所に飼主のない老犬がいた。むかしの飼主は靴屋の老人だったのだが、それが肺病で死んでからも、犬はもとの家を離れず、毎日、あたりをうろつきまわっていた。私は登校や帰校のたびごとに、彼に出会うのを非常に懼れた。皮膚病のためか毛の抜けた赤い生身がむき出ていたし、のみならず、その犬は死んだその旧主人と同じように、たえず、しわぶきながら歩いているのである。そばに近寄れば、皮膚病菌でなくても、結核菌をうつされるような不安が私をいたくくるしめていた。

あれは春も終りの日である。私は十二歳だった。その日、私は病気で学校を休んでいた。母は私を二階のベッドにねせたまま、下の客間で、たまたま尋ねて来た牧師と話をしていた。しずかだった。

ベッドから退屈のままに外を眺めていた。ベッドは窓ぎわにあって、すこし端によれば、家の

前の路がみわたせたのである。

まひることとて路にはだれもない。向い側の家の高い壁からもれ咲いている藤の紫色の花が風に吹かれて散りこぼれている。

が、私はふしぎな光景をみた。家の女中のイボンヌがジツと路の隅にしゃがんで、なにかを手招いている。時々彼女は片手から一片の肉をだして、それをふつてみせる。私は訝しく思った。

病犬は咳きこみながら、イボンヌの方にヨロヨロ近づいていく。彼は、しゃがみこんだ彼女の両脚の間に首をたれて、哀願するような姿勢をとった。

と、イボンヌは、肉片のかわりに一本の紐を手にした。片膝でもがく犬の首をおさえつけたまま彼女は老犬の口を一瞬にして縛った。私は窓に上半身を靠れさせたままふるえていた。イボンヌは肉片を、もう開くことのできぬ犬の口先に、なぶるように持っていく。犬は両足を痙攣させながら、あとずさりしようとする。イボンヌは右手をあげて、烈しく犬を撲ちはじめた。その首が彼女の白い太い腿で押えつけられているため、犬はただ脚だけをむなしく掻きながら苦しまねばならぬ。やがてイボンヌは片膝をあげ、犬の口を縛った紐をとくと、何くわぬ顔をして、私の家の玄関に歩いていった。

今日でも私は何故、あの女中があのようなことを演じてみせたのかわからない。恐らく彼女は、私の家から肉片をぬすんだこの老犬に復讐したのであろう。しかしその行為は、窓からそれを覗いていた十二歳の少年の生涯に決定的な痕跡を残した。私はふるえながら、一切をみていた。しかし、それは恐怖のためではない。可哀想な母が息子に強いた純潔主義の厚い城壁が、そ

の日、音をたてて崩れたのである。私がその時味わったのは、情慾の悦びである。あの肺病やみの老犬の首を押えつけたイボンヌのむっちりした膝がしらは私の眼に焼けつくように白く、あまりに白くのこった。私の肉慾の目覚めは虐待の快樂を伴って、開花したのである。

自分のほの暗い秘密を人にかたる程、私は莫迦でもなくもう無邪気でもなかった。父も母も学校の牧師も、依然として、この私を惡の悦びを味わねぬ一人の少年と思い込んでいたろうが。

聖堂でも私は自分に与えられた影像にしたがって敬虔に祈るふりをしていた。だが、サン・チレーネのあのカルビン小学校の聖堂で私が仰ぎみたのは決して神ではない。壁にかけられた地獄の想像画、そこでは死んだ罪人は裸のまま、黒い惡魔に、責めさいなまれていた。彼等は鞭うたれ、あるいは手脚をもぎとられていた。かつて私に一種の恐怖をあたえたものは、今日、あやしい快感を疼かせる。私は鞭うつ惡魔の見ひらいた眼のなかに、あの日、はじめて味わった叫びたようなよろこびをよみとった。

なぜ、そのような感覚が、他の子供には目覚めず、自分だけにひらかれたのか今でも私はふしぎに思っている。フロイド流にいえば、こうしたサディズムは子供の母にたいするコンプレックスによると言う。もし、その理論通りならば、私は自分をきびしく教育した母をひそかに憎んでいたのではあるまいか。子供としての悦びや自由を禁じ、あのクロワ・ルッスの一室に幼年期を送らそうとした母の中に女性のすべてにたいする憎惡を養っていたのだらうか。だが断わっておきたいが、私の場合、サディズムはこれら都合のよい精神分析学の理窟通りにはいかなかったのだ。私はたんに女性にむかつてのみ、自分の加虐本能を感じたのではない。女性のみならず、す

べての人間、大袈裟おおげさにいうならばすべての人類を苛さいみたいという慾望を私は後年、感じだしたのである。

先を急がねばならない。もう余り時間はないのだ。ふたたび烈しい爆裂音が、この部屋の窓をゆるがせ、壁や天井から、こまかい粉を落してくる。今、破壊されたのはラファイエット橋だろう。

だが、そういうことは、どうでもいい、ナチが敗走しようが、聯合軍がリオンを奪回しようが、ファシズムが潰つぶえて、所謂いわゆる、民主主義が勝利をしめようが、そんなことは、私のあずかり知らぬことだ。抗独運動者、コミュニスト、基督者たちがそこに歴史の進歩、正義の証明を托たくそうが私は無関心である。

もし、明後日のリヨンの運命で私に関係しているものがあるとすれば、それは、私が独逸秘密警察ゲシュタポに協力した裏切者として糾弾されることだけである。マキやその味方を裁き、拷問し、虐待した、あの「松の実町」ボム・ド・チール事件の一味として同胞？から復讐むじやうされるだろう。勿論、私は逃げるつもりだ。私は生きねばならぬ。第一、歴史が、この私を、いや私の裡うちの拷問者を地上から消すことは絶対にできないのだ。その事実を私はこの記録にしたためたいのである。

II

だれも私のあの暗い秘密に気がつかなかった。なるほど母も教師や牧師も私を天使のような子

供とは思ってはいなかったろうが、それでも、やせて蒼ざめた勉強好きな少年ぐらいには考えていたろう。彼等は瞞なまされていたのだろうか。いや、そうではない。あのイボンヌと犬との光景が私の存在の底に燃え上らせた情慾はその後、つかの間にせよ、灰の下に埋もれていたのである。周囲のものたちが私に描いている影像に自分をあわせていく間に、いつか私自身もあの事さえ忘れてしまっていた……

私は他の少年より肉体の発達が遅かった。リヨンのオペラ座裏のアンリ四世中学校にはいつても、他の友だちが好んで話す女学生レ・フイユのことやガリーエーヌ街の淫売ビュタンの話に殆ど興味がなかった。どうせ自分がもてぬぐらいは知っていたのである。この年頃の少年たちが必ず一度はかかる「稚児さん遊び」の熱病にも、まったく無関心だったと言つてよい。だが、時として春の黄昏たそがれ、あの十二歳の病氣の日にもたれた時のように、硝子窓から、藤の花の散る人影ない小路を見おろしながら、体がふるえるのを感じた。心の中で私の手はなにかわからぬものを苦しめるために痙攣けいれんしていた。寝巻を通してシャツまで汗まみれになりながら、その妄想もうそうを追い払わねばならなかった……

アンリ四世中学校を終える前、その年の夏休み、父はいつになく、私を伴つてアラビヤのアデンまで旅行した。それは父にとっては、商用のためだった。彼の経営していた工場が、アデンから亜麻を買い入れるためだ。しかし私にとって、その旅行のあの日は……

あの日、あのことをなしたのは、道德、宗教、家庭、学校がそこに住む一切の人間の本能や慾望をしばりつけている保守的なリヨンの重くするしい空気から突然、南東アラビヤの沙漠のなか